

## 宮沢賢治文学におけるヴァージョンの生成

頼, 怡真

<https://hdl.handle.net/2324/1522371>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	頼 怡真				
論文名	宮沢賢治文学におけるヴァージョンの生成				
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	波潟	剛
	副査	九州大学	教授	松本	常彦
	副査	九州大学	准教授	西野	常夫
	副査	九州大学	教授	谷口	秀子
	副査	実践女子大学	教授	栗原	敦

## 論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、宮沢賢治（明治二九～昭和八年）の文学における「ヴァージョン」の生成に関して、「改作、改稿」という側面と、文化の「翻訳」の二つの側面が密接に関わっている点に注目し、彼の文学作品を同時代のコンテクストを参照しつつ読解することによって、テキストがいかにか改稿され異稿が生み出されてきたかを解明することにある。

本論は、第一部「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と同時代のコンテクスト」（第一章から第三章）と、第二部「宮沢賢治文学における受容とヴァージョンの問題」（第四章から第六章）の二部から成り、第一章「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と「ひのきとひなげし」——「浅草オペラ」と「宝塚少女歌劇団」の追体験」では、「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」（以下「ネネムの伝記」）に登場している「奇術大一座」のナンセンスなコントやマミミの妖艶なダンスなどが、賢治自身がかつて体験した「浅草オペラ」を元にして書かれた点について論じている。この作品における演劇的な要素は、昭和期に入ってから改作「グスコブドリの伝記」や「グスコブドリの伝記」には踏襲されずに消えていったが、賢治が亡くなる直前の昭和八年に、「ひのきとひなげし」（初期形）が「ひのきとひなげし」（後期形）へ書き換えが行われた際に取り入れられた形跡が認められる。

第二章「モーリス・メーテルリンク『青い鳥』と森鷗外「山椒大夫」、宮沢賢治「伝記群」——森で彷徨う「兄妹もの」の系譜」では、明治三五年の翻訳以降、明治・大正期に日本の文壇に多大な影響を与えたモーリス・メーテルリンクの戯曲『青い鳥』の受容について、安壽と厨子王の姉弟が登場する森鷗外「山椒大夫」と、賢治「ネネムの伝記」のネネムとマミミの兄妹像を比較して論じ、第三章「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と夢野久作『ドグラ・マグラ』——E・ヘッケル、名刺、銀時計」では、「大正生命主義」期に知識人たちに多大な影響をもたらした科学者エルンスト・ヘッケルが賢治と久作の作品に影響を与えた点について論じている。これらの章における姉弟・兄妹像やアイデンティティをめぐる比較を通して、宮沢賢治の同時代文化受容のあり方が明らかとなり、従来のナンセンス童話という解釈とは一線を画し、彼の童話作品と同時代文化との具体的な交渉の軌跡を示した。

そして、第四章「ドイツ伝承「ハーメルンの笛吹き男」と宮沢賢治「黄いろのトマト」——人さらいをめぐる言説」では、童話「黄いろのトマト」において不思議な音に誘われて家から外へ向う幼い子ども達が描かれている点に注目し、「ハーメルンの笛吹き男」を媒介としつつ、「ネネムの伝記」と「黄いろのトマト」との比較考察を行った。その結果、「黄いろのトマト」に描かれている子どもの悲しみは、賢治が亡くなった妹のために書いた詩編や「銀河鉄道の夜」に見られる悲しみと性質

と近いものになっていて、人さらいの男のエピソードが書かれている「ネネムの伝記」と「黄いろのトマト」とでは、妹トシの死を前後して相反する内容になったと指摘している。

第五章「夏目漱石『夢十夜』と宮沢賢治「種山ヶ原」——「檜の木」、「篝火」、民俗学の受容」では、漱石『夢十夜』における「第五夜」と賢治の童話「種山ヶ原」を比較し、両作品に共通して登場する「檜の木」、「馬の蹄の跡」、「谷からの墜落」といったモチーフが、それぞれの作家の神話・伝説や民俗学に対する関心を示すことを明らかにしつつ、宮沢賢治が柳田民俗学と距離を取って独自の東北観を主張している点を考察した。

第六章「上海で生成される宮沢賢治——中国雑誌『女声』の文芸欄と「注文の多い料理店」」では、賢治自身も行ったことのない戦時中の上海に注目して、賢治童話の受容について論じた。『女声』の実質的編集者であった関露は、共産党の地下工作員として日本側のプロパガンダ雑誌で働いているという「立場」にあった。そのため、賢治童話の翻訳掲載をめぐることも、読者によっては反植民地主義的とも読める「注文の多い料理店」が掲載作品として選ばれていて、『女声』というプロパガンダ雑誌に、非プロパガンダ的な政治性を見いだすことができると指摘している。

以上の考察を通して、宮沢賢治文学が作り出した世界は、同時代の流行文化や、先行する文学作品を積極的に吸収することで成立した点が明らかになっている。従来から宮沢賢治の文学に関しては決定稿の扱いや、草稿における異同・異稿の比較研究が盛んに行われているが、この研究では、それらに対して、同時代のコンテクスト受容の可能性や比較文学的な視座について検討する必要性を示し得た点で重要な成果を挙げたと言える。概念の理論的枠組みに関する曖昧さや、個々の分析に関する検証の甘さは課題として残されているが、それによって論文全体の意義が損なわれるわけではない。よって、博士（比較社会文化）の学位論文としてふさわしいと判断する。